子ども理解を通したいじめの早期発見・解消・予防
―校長のトップマネジメントによる教職員の意識改革の取り組み―

櫻井　啓雅

『教育学論集』第70号
（2018年3月）

創価大学教育学論集　第70号：櫻井　pp. 291 ～ 305

子ども理解を通したいじめの早期発見・解消・予防
―校長のトップマネジメントによる教職員の意識改革の取り組み―

櫻井　啓雅

1．はじめに

私は、「学校の先生になった途端、いじめと向き合わなければならない。そのためには、日頃からの準備が大切である。」と学生によく言う。その際、いじめの定義を押さえる。

「いじめ防止対策推進法」の施行に伴い、平成25年度から以下のとおり定義されている。

「いじめ」とは、「児童生徒に対して、当該児童生徒が在籍する学校に在籍している等当該児童生徒と一定の人的関係にある他の児童生徒が行う心理的又は物理的な影響を与える行為（インターネットを通じて行われるものを含む。）であって、当該行為の対象となった児童生徒が心身の苦痛を感じているもの」とする。[*1]

私が創価大学で「教職実践演習」の講義を担当し、学生たちに集団討論をさせるとき、多くの場合、論題として「いじめ」を取り上げ、いじめの認知件数を問いかける。確認のために、文部科学省のホームページに公開されている「平成27年度『児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査』」を調べさせる。

その際、平成18年度の件数が前年度の数倍に跳ね上がっていることに注目させ、その理由を考えさせる。

その理由を知るために、文部科学省国立教育政策研究所発行の生徒指導・進路指導研究センター発行・生徒指導リーフ Leaf.11『いじめの「認知件数」』から引用したい。少々長くなるが、正確を期するための引用であることをお断りしたい。

発生件数から認知件数へ

平成18年度分の「問題行動等調査」（正式名称は「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」）から、いじめの件数の呼称は「発生件数」ではなく「認知件数」に改められ、併せていじめの定義（判断基準）についても大きく変わりました。

この呼称と定義の変更は形式的なもののように受け止められがちですが、いじめに

対する考え方を180度転換することを求めるものと言っても、過言ではありません。

単に「数字が多いのは問題」「数字を減らすことが大切」「数字が少なければよい」等と考えるのではなく、「数字の多寡にかかわらず、解消率が高いことが重要」「解消率が高いなら、数が多いのはむしろ積極的に取り組んでいる証拠」と考えることを求めるものとなったからです。

◆「認知件数」が少ない場合、教職員がいじめを見逃していたり、見過ごしていたりするのではないか、と考えるべき。

◆（教育委員会等が）「解消率」等を考慮しないで「認知件数」だけを減らすよう求めるのは誤ったいじめの施策、と考えるべき。

「発生件数」と表現しなくなった理由

いじめという行為は、そもそも大人（第三者）の目には見えにくく、完全に発見することは不可能です。つまり、教職員が認知できた件数は、あくまでも真の発生件数（それを特定することは不可能ですが）の一部に過ぎないのです。

認知できた数を過信しない

例えば、平成23年度分の「問題行動調査」では、いじめの「認知件数」は、7万231件でした。一方、平成24年に実施された「いじめ緊急調査」における「認知件数」は4月から9月までの半年余りで14万4054件でした。この開きは、実際にいじめが急増したからではなく、いじめ自殺事案を受けて積極的にいじめを把握しようと努めたことから生じたものです。

（中略）

いじめの定義（判断基準）について

平成18年度の「問題行動等調査」からは、「認知件数」の呼称変更と同時に、いじめの定義（判断基準）についても見直しが行われました。

18年度からの新定義

新しい定義（調査を行う際の判断基準）は、以下のとおりです。

本調査において、個々の行為が「いじめ」に当たるか否かの判断は、表面的・形式的に行うことなく、いじめられた児童生徒の立場に立って[1]行うものとする。

「いじめ」とは、「当該児童生徒が、一定の人間関係のある者[2]から、心理的、物理的な攻撃[3]を受けたことにより、精神的な苦痛を感じているもの[4]。」とする。なお、起こった場所は学校の内外を問わない。

旧来の定義との違い

従来の基準は、「『いじめ』とは、『①自分より弱い者に対して一方的に、②身体的・心理的な攻撃を継続的に加え、③相手が深刻な苦痛を感じているもの。なお、起こった場所は学校の内外を問わない。』とする」でした。しかし、「一方的」「継続的」「深刻な」という基準に当てはまらないとの理由でいじめの件数に含めなかったとの報告があったことから、変更されました。[*2]（引用以上）

2. 校内のいじめ

(1) いじめの発覚

平成18年4月、私が校長として赴任した時の静岡県富士宮市立井之頭小学校は児童数66名、教職員数11名の小規模校であった。

児童の特色は、良い面としては、明るく活動的。素直で勤労意欲がある。互いをよく知り助け合う。工夫して生活を良くしようとする等であったが、思いやりに欠ける言動が見られることがあり、積極性に欠け、教師や友人に依存しやすいという改善したい面もあった。

さて、同年10月教え子である保護者よりいじめの訴えがあった。小２の男子が同級生の男子にいじめられているという訴えだった。私は、すぐに担任と連携していじめの解消に取り組むとともに、緊急のいじめ対策を全職員に指示した。個別教育相談、いじめアンケートの実施の２点である。多忙な日常業務の中であったが、最優先課題として全校あげて迅速に対応した。

その結果、数件のいじめが発見された。職員はいじめかどうかの判断に迷っていたが、私は、いじめの定義に基づき、少しでも疑いがあれば、積極的に関わり、解消に向けて努力しようと訴えた。また、先のいじめ問題の解消に向けて、先頭に立って担任とともに本人たちを指導したり、保護者とも面談したりした。その姿勢に触発されたのか、職員も今まで以上に真剣にいじめに向き合い、児童への聞き取り、指導、保護者との連携等、神経の磨り減るような対応を続けた結果、いじめは一つ一つ解消していった。

生徒指導主任が月例報告のいじめ件数の急増を懸念していたが、私は、「心配ない。増えてもよいのだ。見えないいじめを発見でき、認知できたのだから、前進しているのだ。今まで以上に解消に向け努力を続けよう」と訴えた。

(2) いじめの早期発見・解消・予防のために

小２のいじめも、幸い早期に解消することができた。しかし、保育園の頃からいじめが続いていたのに、今までなぜ分からなかったのか？いじめを見抜く目を持ちたい！と強く思った。

いじめを早期発見し、解消し、予防するためには校長は何をすべきか？それまでの自らの実践、市教委指導主事時代の研修なども絞り出すように思い出しながら真剣に悩み考え抜いた。その結果、「子どもに寄り添い、子ども理解を深めること」がいじめの発見・解消・予防に結びつくのではないか。その実現のために全職員挙げて組織的・計画的に取り組むべきであるとの結論に至った。

3. いじめの早期発見・解消・予防への取り組みの記録

「子どもに寄り添い、子ども理解を深めること」をテーマとし、それを実現するために、何をしたらよいのか教頭や教務や研修主任とも相談しながら思索を続けた。

井之頭小は小規模校であるために一人の校務分掌がとても多く、日常業務が繁多であり、ともすれば、今年の企画立案が前年度の踏襲になってしまいがちであったり、相談相手も無く発想も固定化しがちであったりする等の悩みを抱えていた。そこには、子ども理解は大切であると分かっていても、それを学ぶ物理的・精神的なゆとりは少なかった。そこで大事になってくることは、チームで考え事に当たることであると思った。チームで取り組めば、一人では浮かばなかったような知恵が浮かんできたり、経験の共有化が図られ互いの成長につながったり、同僚性も育まれたりすると考えた。

今いる教職員でテーマ達成のための効果的な実践をするためには、教職員の意識改革を進めることが大切であると考えた。創価大学の創立者である池田大作氏の言葉に「子どもにとって最大の教育環境は、教師自身である。」というものがあるが、これは普遍妥当性を持つ珠玉の教育指針であると感じる。教師が変われば子どもが変わる。教師の意識の変革は、現実を変革する大きな力を持っていると思う。そのためには、学校組織の活性化を図ることが大切であると思った。

そして、校長はそのためには何をすればよいか考えた。その結果、１「明確な方針の提示」、２「校務分掌の見直し」を通してねらいに迫ろうと思った。

(1) 明確な方針の提示

校長がリーダーシップを発揮して、明確な方針を示すことにより、教職員の意識が変わり、よりよい実践に取り組むことができるようになると考えた。方針として、次の４点を示した。①子ども理解の徹底、②重点目標を「やさしくしよう」に、③ほめる・認める・励ますことの励行、④やさしい心を育てる場の設定である。

① 子ども理解の徹底

いじめ発見直後に指示した２点、すなわち個別教育相談、いじめアンケートの実施をより一歩前に進め、更に全職員が常に取り組むことができるように工夫した。

・教育相談週間の定例化。
・実践記録の励行の継続。
・子ども理解を学校経営目標へ明確に位置付けること。
・研修の仮説へ子ども理解を位置付けること。

これにより、教職員の構えとして、子ども理解を中核に置くという体制が固まった。

②「やさしくしよう」を重点目標に

先生方は、その重点目標に基づいて、いろいろな取り組みをしてくれている。例えば、

・１年生は学級名を「やさしさ学級」にした。

・５年生は学級目標を「やさしくしよう」にした。

・朝の会や帰りの会の次第に入れ込み、毎日やさしさを追求する学級もある。

・「ずっとともだち」のポストを作る学級もある。

全校あげて、日々の生活の中で重点目標の実現に取り組んだ。

③ ほめる・認める・励ますことの励行

今の子どもも大人も自分に自信が持てないでいる人が多い。特に問題行動を起こす子に自信が持てない子が多いと言われている。私も、自己肯定感、自己有用感、自尊感情、自己存在感、自信を持たせるために、

・職員への啓蒙

職員会議の校長指示事項、校内研修での校長の話、朝の打ち合わせ等で、ほめる・認める・励ますことの励行を職員に訴えてきた。

・掲示の工夫

学校を子どもの居場所にするために、誕生日の子の写真を撮り、額に入れて子ども用玄関正面に掲示したり、朝運動の様子や学校生活の様子をデジカメで撮って掲示したりすることを続けた。

④ やさしい心を育てる場の設定

・感謝する会

毎朝交通指導をして下さったお巡りさんや手縫いの雑巾を寄付して下さった近所のおばあさんに感謝する会を持った。家族で参加して下さったお巡りさんや目に涙を浮かべながら感謝の言葉を聴いて下さったおばあさんの姿からも、人に尽くすやさしさを学ぶことができたと思われる。

・コンサート

いじめを乗り越えてコンサート活動を続ける女性歌手に来て戴き、いじめの内容、いじめを受けた時の気持ち等の体験を涙ながらに語って戴いた。また、澄んだ歌声を披露して戴き、会場の体育館全体が感動に包まれた。

・琴教室

情操教育の一環として、琴の先生方４人に年間20回ほどボランティアで来校願い、希望者に琴の指導をして戴いた。３学期の始業式には、宮城道夫の「春の海」を演奏して戴くことができた。琴の先生が尺八の先生にも声をかけて下さり、新年に相応しい伝統的な名曲の演奏を子ども達に聞かすことができありがたかった。

(2) 校務分掌の見直し

小規模校であるため校務分掌が縦割りになりがちであったのを、最低二人のチームで取り組むように分掌の見直しをした。チームで取り組むことにより、視野が広がったり、知恵も出てきたりする。よりよい内容の取り組みになりやすいと考えたからであった。

① 研修部

研修主任だけであったが、特別支援教育の学習担当も加わり、LD[5]や ADHD[6]と思われる子に対しても光を当てていく。その指導方法も含めた研修を通して、NRT[7]、WISC[8]等の各種調査の分析や、それに基づいた授業改善、毎週月・金の放課後15分実施している基礎学力定着のためのチャレンジタイムの工夫、取り出し指導等、子ども理解に基づいた学習指導に力を入れた。

研修を積み重ね、日々の授業の改善を意識するようになってから、徐々にではあるが、個に応じたきめ細かな指導ができるようになってきた。子ども理解に基づく課題の設定、授業過程の工夫にもその成果が表れてきた。

また、学校における指導ばかりではなく、保護者の理解・協力を得て、その子に応じた効果的な家庭学習の計画を立て、実施してもらった。

② 生徒指導部

生徒指導主任と特別支援教育・就学指導担当がチームを組み、相談しながら様々な取り組みをした。例えば、気づかってくれる言葉や理解してわかってくれる言葉、はげましてくれる言葉等の一覧表「やさしさを伝えよう」を作成し、全クラスに配布し、掲示した。担任はそれを背面黒板に転記するなど、効果的な利用を心がけた。また５月の生活目標にも「やさしい言葉をつかおう」を意図的に設定した。

いじめについて、教職員に対し、「いじめはいじめた側が100％悪い」を合い言葉にして「いじめは悪」であることの意識化を図った。「いじめられた側にも問題がある」と思って接すると、どうしてもいじめた側に甘くなってしまう。それを子どもは敏感に察知する。「いじめは、いじめる方が悪いのだ！弱い子には、やさしくしなければいけないのに、いじめるとは何事か！という考え方で行こう！」と訴えた。

また、いじめた側に対してもケアーをし、２度といじめを起こさないように指導するとともに、家庭と連絡を取り、その子の抱えている悩みやストレス等にも気を配り、解決に向けた手を打つことは当然であると思う。

子ども理解に徹することは、いじめの芽を摘むことになると考える。

富士宮市は、「いじめ対策委員会」を組織し、市内の小・中学校のいじめ対策に取り組んでいる。年３回各校でいじめアンケートを実施し、集計している。小学校は４年生以上、中学校は全学年を対象にしている。また、その結果を分析し、

考察を加え各校に返し、いじめの早期発見と防止に資する取り組みをしている。

生徒指導部は、低学年でもアンケートを実施し、それに基づき全職員がきめ細かな指導を続けた。その結果、嫌なことをされたり、言われたりすることが、目に見えて改善されてきた。

③ 特別活動部

５年担任の特活主任と６年の担任で構成した。児童会は「やさしさを広げる運動をしよう」をスローガンに、代表委員会で次のことを決めた。

・「やさしさくんポストとやさしさの木の設置」

やさしさや感謝などの言葉を葉っぱに書いてポストに入れ、それを集めてやさしさの木を作り、児童や保護者の目に触れやすい児童用玄関に設置した。立ち止まって読んでいる姿がよく見られるようになった。

・「山葵やうさぎの世話」

休みの日でも山葵田のゴミとり、うさぎのえさやり等に誰彼となく来てくれた。兄弟姉妹、両親、祖父母等、家族とともに来て下さることもあった。

・「やさしさ集会の実施」

小規模校の子は表現力に欠けるという理由から研修と絡め、「元気集会」を実施していたが、それを「やさしさ集会」へ変更し、毎月１回朝20分間、様々な工夫をこらしてやさしさを表現する機会とした。

4.　活動の分析と提言

ここまで、私が小学校長時代に行った子ども理解を通したいじめの早期発見・解消・予防の取り組みについて、校長のトップマネジメントを通した教職員の意識改革のあり方を強調しながら紹介してきた。ここからは、その当時の実践の成果について分析し、多くの学校や教員が頭を悩ませるいじめ問題の解決に向けて、有効と思われる活動を提言していきたい。もちろんこの複雑で深刻な問題に対して万能の特効薬のようなものは望めないが、それでも現実のさまざまないじめ問題に通底するある種の共通点を見出し、それに対して力強くアプローチしていこうとする努力は、決して無駄ではないと思われる。

(1) 教職員の変化

井之頭小学校における、校長のトップマネジメントによる子ども理解を通したいじめの早期発見・解消・予防への取り組みの実践の結果、どのような変化が生じたのか振り返ってみたい。まず教職員の変化から分析する。

① 子ども達との活動時間を大切にしたこと。

子ども達との活動時間を大切にすることにより、見えない姿が見え、それが子ども

理解につながった。それまでも子ども達の生活指導には十分な時間を割き、一人ひとりの個性に応じたきめ細かい指導をしてきたつもりではあったが、それでもなかなかいじめの現実には目が向かない実態があった。子ども理解に努め、教員がチームを組んで一緒に時間を共有する中で、子ども達の実態がだんだんと明らかになり、弱い子に寄り添うこともできるようになった。振り返れば当然のことであるが、校長以下の意識改革がなければ、このような変化を起こすことはできなかったと思われる。

例えば、私は、20分休みや昼休みを中心に、外に出て子ども達と遊んだ。放課後も時間の許す限り遊んだ。子どもは遊びから多くのことを学ぶ。遊びを通して協調性、忍耐力、創造性等を養うと言われている。けいどろ（どろけい）、鬼ごっこ、ドッジボール、遊具での遊び等に加え、木登りもすすめた。養護教諭も一緒に遊んでくれた。子どもが怪我をしても養教と校長が現場にいるのだから、すぐに対処することができた。校長が子どもと遊ぶことは私の夢であり、大げさに言えば「子ども第一」の教育哲学をかけた実践であった。

その結果、教室では見ることができない子ども達の様子を見ることができた。私は、子ども理解が教育の基盤だと思っている。「はじめに子どもありき」であり、目の前の子どもの事実から出発するのだ[*3]。一緒に遊んだり様子を観察したりすることを通して、子ども達の人間関係を把握することも大切なねらいの一つであった。勿論、把握した実態や様子をことあるごとに担任に報告し、情報交換を欠かさなかった。教育的情熱を注ぐ優先順位を率先垂範で示したつもりである。

② 実践記録をつけることにより、子ども理解を進めたこと。

実践記録をつけ、それをまとめて分析することを通して、子ども理解を進めていった。また、そのことを授業改善に結びつけるよう努力を重ねていった。授業時間は全教育活動の８割を占めると言われている。その授業が、分かる授業になることは、子ども達にできる喜びや達成感を味合わせ、自己肯定感や自尊感情等を高めることになる。その積み重ねにより、いじめなくなったり、いじめられても跳ね返せるようになったりする、ということが言われているが、その通りになっていったと思う。また、分からないと素直に言えたり、質問したりすることが気軽にできるような授業。人を馬鹿にしたり、卑下したりすることがない授業。換言すれば、生徒指導が機能する授業を展開することにより、子ども達の人権意識が高まっていった。いじめの解消と予防を目指し、まず教師が率先して実行し、子ども達とともに努力を積み重ねる過程で、多くの学級が、やさしさに溢れる仲の良い学級に変容していった。

③ 学校全体を組織として機能させたこと。

校長の学校経営方針が浸透し、子どものためなら労を惜しまないという気風が醸し出されてきた。また、校務分掌を見直し、チームを作り、複数の教職員で意見を出し合い対処することにより、孤立無援の状態が無くなった。更に、教科担任制の一部導入や小規模校故授業数の少ない中学校の先生方に兼務辞令が発令され、小学校の授業

を担当するようになったことにより、専門を活かした分かる授業、できる授業の実現が図られた。中学の先生方は、1･2･4･6年の音楽に年間35時間、5･6年の算数に年間20時間来て下さった。このことにより、学級担任だけでなく、複数の目で学級の子ども達を見ることができ、きめ細かな情報交換をする中で子ども理解が進んだ。このことは、特にいじめの発見・解消・予防のために有効であった。それは、学級王国からの脱却にも繋がった。更に、小・中の円滑な接続という課題に対する一つの答えが見つかったことは、大変重要なことであった。

(2) 子どもの変化

教職員の変化に次いで、子どもの変化について振り返ってみたい。

① やさしさに気付く心が育ち、やさしくなった。

やさしさ集会で発表された、全学年による発達段階に応じたしかも工夫されたやさしさを広めるためのパフォーマンスが、とても感動的であった。子どもは子どもに特に共感する。他学年の子どもが表現する、やさしさのインプットとアウトプットに触れ、驚いたり感心したりしていた。本校で目指すやさしさを、他学年の子どもとともに作り上げていく中で各人が変容していった。６年生が１年生をおんぶして遊んでいる姿が随所に見られ、微笑ましいと思っていたが、小学校に遊びに来た保育園児の面倒を、言われないのに自然に見る１年生のやさしさを、とても嬉しく思った。してもらったことを、してあげているのだなと思った。その光景を目にした時、やさしさの継承が自然になされているのだなと感じ、とても嬉しくなった。

② 貢献しようとするボランティアの芽が伸びてきた。

成果の具体の一例であるが、保健便りにのせた「やさしさいっぱいのトイレ」に共感して、トイレのスリッパがきれいにそろうようになったり、トイレットペーパーが、時々三角に折ってある男子トイレがでてきたりと、成果が表れてきた。

また、３年生の女子が提案して、自然に集まり始まった池の掃除の姿を見て、私は感動した。みんなのためになることをしようというボランティアの心が芽吹いてきたからである。私は、教職員にこの芽生えを大切にしようと呼びかけた。池ではモリアオガエルのおたまじゃくしが泳ぐようになった。このボランティアの芽生えは、挨拶運動にもつながった。主体的・積極的に朝の挨拶運動に加わる子ども達が増えていった。

また、分校の定期的な地域のごみ拾い活動及びごみ捨て禁止の立て看板の作成と県境への設置は、環境美化のための尊い活動として、食品協会により表彰された。

③ 明るく溌剌とした学校生活を送るようになった。

いじめ発覚から２年間、「子どもに寄り添い、子ども理解を深めること」をテーマとした教育活動を実践してきて、いじめの早期発見・解消・予防における成果が出てきた。しかし、内部評価ではそう言えても、外部評価ではどうか？それが試される機

会があった。学校の教育活動は、如何に繕おうと、子ども達の日常生活の有り様がそのまま出てしまう。雰囲気として表出してしまう。

平成20年２月２日（土）、富士宮市民文化会館で開催される第10回富士山学習発表会のステージ発表校として1,200名収容の大ホールの舞台で発表した。富士宮市においては、総合的学習の時間を「富士山学習」と称している。年１回、１年間の学びの総決算として、市を挙げて富士山学習発表会を行う。発表は、展示発表とステージ発表に分かれ土曜日の午後行う。ステージ発表校は４～５校として、それ以外の学校は、展示発表をする。（富士山学習 part Ⅱになってからは、午前中全校の代表が数校ずつに分かれ、学びについてプレゼンテーションをし合う。）

井之頭小学校の発表テーマは「すてき発見！いのかしら『毛無山金鉱太鼓』」であった。６年生の学びをきっかけに、小学校に伝わる陣場の滝太鼓の演目名「毛無山金鉱太鼓」と地域の歴史との関係性に興味を持ち、課題を発見し、追及し、解決するという流れを劇仕立てにして、全校生で発表した。その際、保護者や地域の方々に地域の歴史について教えて戴いたり、大道具・小道具作成の応援をして戴いたりした。

「わたしたちのふるさと活動」佐野知央

「陣場の滝にひびきわたる太鼓の力強い音。十六人の心が一つになったしゅん間だ。緊張しているので、手がふるえ汗もどっと出てきた。気を抜くことはできない。なぜなら、わたしたち六年生は、この日のために五年生の

ときからずっと…」

（国語の教科書に載った卒業生の作文）

大きな目標に向かって、子ども達を中心に教職員も保護者や地域の方々も一体となり、一生懸命練習したり準備したりした。その過程で子ども達が成長していった。その成果はアンケート結果の集約から明らかになった。

「第10回富士山学習発表会感想のまとめ」から　平成20年３月３日（月）

子どもの声から

＜小学校＞

・井之頭小の毛無山金鉱太鼓の歴史や井之頭小との関わりがよく分かってよかったです。

・井之頭小学校の太鼓演奏が、とても迫力があって、一番印象に残りました。

・太鼓がとてもかっこよかった。

・井之頭小の発表が心に残りました。太鼓の演奏は声が出ていて、たたき方も力強く良かったです。衣服もリアルでしゃべり方も昔っぽくて良かったです。内容は毛無山のことがびっくりしました。武田が火をおこすために切っていたとは知りませんでした。

・最初の太鼓の演奏はびっくりしました。その後の説明が分かりやすかったです。

・和太鼓の演奏は、迫力があり、感動しました。

＜中学校＞

・井之頭小学校の発表が、太鼓の演奏が入っていたりして、工夫されていてとても迫力があってすごかったです。

・井之頭小学校の太鼓は本当にすごかった。振り付けもぴったり合っていたし、声も出ていて本当にかっこよかった。

保護者・地域の声から

＜小学校＞

・金鉱のことや毛無山の由来などを分かりやすく大きな声で発表している子ども達は、生き生きとしていて素晴らしかった。富士宮に住んでいても知らないことがたくさんあり、勉強になった。次回も参加したい。

・井之頭小…歴史にまつわる太鼓を今も伝承している。後世に残していって欲しいです。

・少ない人数で、ステージをどうやってうめていくのか、どのような発表をあの少人数でしていくのかとても心配でした。でも、広いステージが狭く感じられるくらい力強い太鼓の音、大きな声ではっきりとしたセリフ、まっすぐに見据える目……子ども達が大きく見えるとはこういうことだと感心しました。（井之頭小保

護者）

・低学年の子ども達が、井之頭小の全校児童数よりも多い観客を前に、堂々と演技する姿に環境は関係ないんだと思いました。（井之頭小保護者）

・子ども達をしっかり把握してくださる先生方のご指導のお陰だと思いました。素晴らしいひとときをありがとうございました。（井之頭小保護者）

＜中学校＞

・井之頭小学校の発表は、低・中学年の児童も大変素晴らしい演技をしていてとても良かった。

・井之頭小のステージ発表を見ましたが、小学生とは思えないほどまとまりのある、わかりやすい発表でした。小道具や太鼓もすばらしかったです。

教職員の声から

＜小学校＞

・オープニングに太鼓を持ってきたのは、迫力があって良かった。

＜中学校＞

・井之頭小の発表では、毛無山金鉱太鼓や源頼朝出陣太鼓など地域とのつながりの中から課題を見つけ、学校全体で取り組んでいる姿が発表から見られて、大変素晴らしいと感じた。

・井之頭小学校の太鼓の演奏がとてもよかった。全校生徒による劇も元気よく、とても分かりやすかった。

もう一つ、非常に印象に残った事例を紹介したい。

大規模校でいじめにより不登校になった男子児童がいたのを、当該校の校長の依頼で私のいた分校に引き受けたことがある。発達障害の疑いありとの診断結果だったため、最初は１時間から始めて、だんだんと彼の滞在時間を延ばしていくようにした。中学校に進学する前に、ゲーム交流会等で本校の子たちと仲良くさせたいと考えた作戦はなかなか実を結ばなかったものの、彼を何とかしたいという強い思いと夢中の行動は、間違いなく教職員の意識を変え、多くの場面を通じて子ども達を変容させていった。

さて、分校の主任は図工の指導に定評のあるベテラン教員で、徹底して彼に寄り添った結果、彼が絵の才能にあふれていることを見抜き、やがて彼の絵の才能は急速に伸びていった。市のコンクールで入選したのをきっかけに、作文なども入選するようになり、絵を描くことで得られた自己肯定感が徐々に顕在化していった。彼はいじめによる不登校を転校で乗り越え、自信みなぎる目を輝かせながら晴れやかに卒業していった。その後愛知県の高校を卒業した彼は、今では東京都美術館の第66回創造展、国立新美術館の全日本アートサロン絵画大賞展等、数々の公募展に入選し、個展も何回も開催する新進気鋭の若手画家となっている。

私が2013年に小学校を定年退職した時、彼から大きな額入りの花の絵が届いた。個展の時のお気に入りの絵を覚えていてくれて、創作してくれたとのことで、私は感動した。私は各地での講演の際その絵を掲げて、子ども達がもつ無限の可能性を引き出すことが大切であり、そのきっかけ作りや環境の醸成には保護者や教員の慈愛あふれるかかわりが不可欠であると訴えている。

5. まとめ

校長は、いじめの早期発見・解消・予防を目指し、「子どもに寄り添い、子ども理解を深めること」を実現するために、教職員の意識改革の推進を図る。そのためにまず自らが一人の子ども理解に徹する教育活動を実践する姿を通したリーダーシップを発揮することが大切である。それはやがて子ども本人は勿論のこと、保護者や地域の人々等にも影響を与えるようになる。

ここまで述べてきたことは、私自身の個人的な経験に過ぎないかもしれないが、相変わらずなくならないいじめの現実と戦う全国の教職員が、対策の指針の参考にしてもらえるといいなと思う考えや行動が、そこには数多く含まれていると感じる。

何かの現実を克服し、改革しようとするときは、まず行動を起こさなければならない。しかし組織を構成する各人がそれぞれバラバラに行動したのでは、期待する成果が得られるはずがない。したがって、まず組織の長が真剣に悩み、本気の行動を起こすことが何よりも大事となる。いじめの場合、事実を正確につかみ、その根を断ち切らなければならないから、校長による率先の行動がまず重要であると言えよう。

その次は、後に続く者が、その行動の結果を吟味しながら、力を合わせてさらに新たな行動を起こしていけばよい。このときも、組織の長と同じ気持ちで進まなければならないが、かといって盲従でもいけない。長の行動を理解し、その気持ちを汲みながら、後に続く者がより工夫しながら問題解決に臨む。学校で言えば、教職員達が校長の目標を理解して、同じ方向へ、さらに工夫しながら進むのである。

そのときに、その行動はさらに周囲にも影響を及ぼし、組織全体が有機体として動き出す。学校で言えば保護者や児童たちの出番である。そうなればもう問題解決は目の前である。

・組織の長が考え、本気の行動を起こす
・それに続く者が長の本気を理解する
・行動の結果を分析しながら、より多くの人が新たな行動を起こす
・周囲の人も同じ気持ちで協力するようになる

こう書くと簡単なようであるが、すべては最初に行動を起こす長の真剣さにかかっている。それが、私が校長として様々な問題に取り組んで得た「手ごたえ」である。全国の学校関係者が、この手ごたえを感じ取って、いじめのない学校づくりへと前進

していって欲しいと願う。

注

1 いじめられたとする児童生徒の気持ちを重視することである。
2 学校の内外を問わず、例えば、同じ学校・学級や部活動の者、当該児童生徒が関わっている仲間や集団（グループ）など、当該児童生徒と何らかの人間関係のある者を指す。
3「攻撃」とは、「仲間はずれ」や「集団による無視」など直接的にかかわるものではないが、心理的な圧迫などで相手に苦痛を与えるものも含む。「物理的な攻撃」とは、身体的な攻撃のほか、金品をたかられたり、隠されたりすることなどを意味する。
4 けんか等を除く。
5 学習障害と訳される。知的発達の遅れは見られないが、特定の能力に著しい困難を示すもの。
6 注意欠陥多動性障害と訳される。発達段階に不釣り合いな注意力や衝動性、多動性を特徴とする行動の障害である。
7 Norm Referenced Test 標準学力検査／集団基準準拠検査
8 Wechsler Intelligence Scale for Children 知能検査。WISC-Ⅳ検査では、・言語理解・知覚推理・作業記憶・処理速度という 4 項目の IQ と、その平均値である「全検査 IQ」を知ることができる。

参考文献

1 生徒指導リーフ Leaf.11『いじめの「認知件数」』、文部科学省国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター、2013 年、http://www.nier.go.jp/shido/leaf/leaf11.pdf（2017 年 9 月 1 日閲覧）
2 同上.
3 平野朝久『はじめに子どもありき－教育実践の基本－』、学芸図書株式会社、1994 年.

Early Detection, Resolution, and Prevention of Bullying through Understanding Children

—Efforts to Reform Consciousness of Teaching Staff by Top Management of the Principal—

Hiromasa SAKURAI

In this article, from the analysis of ‘various investigations on bullying’ that I dealt in my university lectures, I pay attention to the point that the numbers of recognition of bullying differ significantly depending on the report mind of the schools that respond. I was promoted to principal of an elementary school in 2006, just when the report to MEXT changed from the number of occurrences to the number of cognitions of bullying. Through the experience confronting bullying at the educational site, I introduce my efforts to reform consciousness of faculty staff by top management of principal aiming at early detection, resolution, and prevention of bullying through understanding children.